

080119 里としての海について考えるシンポジウム

13:00~16:00

虎ノ門パストラル・新館5Fミモザ

主催：全国漁業協同組合連合会

共催：海と魚と食を考える会

中島によるテープ起こし原稿—その1

【未定稿：主催者及びおもな発言者の確認はえていますが、参加者全員の確認を得ていませんので複写転送等の利用は禁止します。また、公開に一人でも意義を唱える方がでてくれば、ファイルを削除します。文責は中島です。】

○開会——全漁連 参事 長屋信博

ただいまより「里としての海を考えるシンポジウム」を開催させていただきます。進行役をつとめさせていただきます全漁連の長屋と申します。本日、全漁連と「海と魚と食を考える会」との共催で「里としての海を考えるシンポジウム」を開催いたしましたところ、大変お寒い中、全国から130名を越える方々のご参加をいただきました。主催者といたしまして、大変心から厚くお礼申し上げます。それでは、開会に当たりまして、主催者を代表いたしまして、全漁連宮原専務よりご挨拶を申し上げます。

○主催者挨拶——全漁連 専務理事 宮原邦之

ご紹介をいただきました、全漁連の宮原でございます。全漁連は皆様がたご存知の方が大多数であろうと思いますが、全国の漁業協同組合の全国団体でございます。全国の漁業者を代表する立場にあるわけでございます。今日は、たいへん貴重なお休みの日に、こんなに多数のかたが、お集まりをいただきまして、先ほど司会の長屋のほう

から申し上げたように、全国各地からお集まりをいただき、心からお礼申し上げます。

本日は、このシンポジウムは、水産庁さんのご支援を頂戴しておりまして、私ども全漁連が、水産庁の委託事業という形で、「環境生態系保全活動支援調査実証事業」、舌をかむ長さでございますが、こういう事業を全漁連がやらしていただいているわけでございます。

また、この事業と「海と魚と食を考える会」の会長は、皆様方よくご存知の、服部幸應先生でございますが、本日は他の仕事のご都合で欠席で、大変申し訳ないと、後ほど、メッセージをご披露させていただきます。

「海と魚と食を考える会」は三年前に発足をしたわけでございます。資源、環境は大丈夫だろうか、魚の消費が落ちてきているのではないか、という、環境、食の安全安心の問題に対する関心が非常に高まっているわけでありまして、こういった問題に広く、国民全体として、考えていただきたいということで、こういう会を作りお願いしたわけでございます。服部先生をはじめ、有名な学会の著名人の方々に、メンバーに入ってもらっております。そういったことで、この会もようやく3年目を迎えるわけでございます。

漁業につきましては、皆様方、大変にご関心をいただいているのではないかとおもっておりますが、皆様のイメージの中には、魚をとって、それを消費者に提供する、ということで、よくテレビ等でもご覧になっていただいているわけでございますが、漁業者ははどちらかといえば、魚をとって、魚市場に水揚げをしたらそれでおしまい、というかたちがおおいわけですが、これからの漁業者のあり方は、やはり、消費者といかに直結していくか、つながっていくかということ視点をにおいて活動をしていかなければ、国民の納得のいく

ような、消費者の安全安心といった信頼を得られないというようなこともあるわけでございます。

こういったことで、消費者と漁業者と生産者が、こういう場を通じて連携を強化していきたい、ということで、この会を発足したわけでございます。

現在の漁業を取り巻く環境は、大変に厳しいわけでございまして、沿岸域につきましても、環境、汚染の問題等を抱えておるわけでございます。さかなが健康に育つためには、海がきれいであればならないわけでございますが、漁場や海岸の清掃をするなり、魚が産卵する場所を、こわれていたら、元に復元するとか、そういったことをしていく必要があるわけでございます。

会場にパネルを用意してございます。のちほどごらんになっていただければありがたいとおもいます。生態系をいかに保全をしていくか、ということで、こういうとりくみをしているわけでございます。森川海の栄養のつながりを保つために、現在漁師が山に木を植える活動もしているわけでございます。

また、都会のかたがたが海辺に来ていただきまして、レジャーの場として、活用をいただいているわけでございます。この沿岸域というのは非常に大事な場であるわけでございます。いま、CO₂の問題、地球温暖化の問題が叫ばれているわけでございますが、森林が、CO₂を吸収する効果が非常に高いということが言われておりますが、京と議定書の中には、残念ながらはいておりませんが、海藻がこのCO₂を吸収する効果というものも、森林に負けず劣らずもっております。やはりこの、藻場干潟をいかに保全をしていくかということが地球環境を守っていくということにつながる、また、温暖化を抑えていくという効果もあるわけでございます。

こういったことも、地球温暖化への対応という

ことに、海が果たす役割、漁場が果たす役割というものを、ご理解をいただきたいと思っております。

最近のテレビでは、オーストラリアの近海で日本の捕鯨船にたいし、シーシェパードという海賊行為をする連中が、乗り込んできている報道がされておりますが、おおいっことに血道をあげるより、この、藻場干潟を守っていくこと、地球温暖化をいかに防いでいくかということに、対する取り組みを深めていかなければならないのではないかとございまして。

われわれ漁業者は、そういったことで、藻場干潟を守る活動をしているのだということ、皆様方にもご理解を頂戴いたしたいと、このように申し上げます。

漁業生産活動と多面的機能、とわたしどもは、いっております。漁業・漁村の持つ他面的機能が両々あいまって活動されていく、そしてそれを形成するのが海であり、そしてそれを支えていくのが「里海」(さとうみ)ということにつながるわけでございます。

里海という考え方は、まだ定義がなされていない、ということでございまして、里海に対しましての、国民の皆様の関心は非常に高いわけでございます。水産庁では、さきほど申しましたように「環境生態系保全活動支援調査実証事業」ということを通じて、この「里海」のPRをしていただいているわけでございます。環境省においても、20年度の予算の中に「里海創生事業」というものを仕組むといわれております。

また、昨年でございますが、NHKのテレビでも一時間番組の「里海の四季」として、特集が組まれたわけでございます。里海の持つ豊かな資源、そして、そして、そのなかで生活をする地域住民、漁業者の姿が描かれていたと思うわけでございますが、ご覧になられた方も多数いらっしゃると思

います。

本日は、そういったことで、里海について、今日のシンポジウムでいろいろなかたがたのご意見を伺いながら、ご議論をしていただきたいと、お願い申し上げるしだいでございます。

このシンポジウムがこうした活動の一環として、開催をしているわけですが、最初に、哲学者の内山節先生に基調講演をいただきたいと、考えております。

内山先生につきましては、ご存知の方も多数おられるとは存じます。農村にお住みになられて、自然や労働に関して思索を続けておられるわけですが、本日は、皆様方とともに、内山先生のお話を拝聴し、皆様、そしてパネラーの方々とともに、考え方を深めていきたいと考えているしだいでございます。

そのご、有識者の方々に、パネルディスカッションを行っていただきます。漁業や環境について研究をされている方々、NPOとして実践活動をしていただいている方々のお話、ご意見を通じて理解を深めることができれば大変に幸いかと思っております。

以上長くなりましたが、皆様方に取りまして、このシンポジウムが有意義なものであるとりますことを期待いたしまして、開催に当たりましての挨拶とさせていただきます。

ひとこと、よけいなこととなりますが、申し上げますが、本日は、水産庁長官がお見えになっておりますことをご案内申し上げます。

どうもありがとうございました。

○ 長屋 それでは次に、本日来賓としてご臨席いただいております、水産庁漁政部企画課の石川課長よりご挨拶いただきます。

○来賓挨拶 水産庁、石川裕漁政課企画課長

ただいまご紹介をいただきました水産庁漁政部企画課長の石川でございます。本日は諸先輩の皆様が多数いらっしゃっておりますが、せん越でございますが、先ほど宮原専務の話にございました、「環境・生態系保全活動支援調査・実証委託事業」と舌をかみそうな名前の事業を所管している課の代表といたしまして、ご挨拶をさせていただきます。

さきほど宮原専務のおはなしにもございましたように、日本の沿岸域の藻場干潟は、非常に漁業生産の場として貴重な場であるというだけではなく、皆さんご承知のとおり、いろいろな多面的機能を有しているところでございます。そうした非常に貴重な藻場干潟があるわけですが、あちらのパネルにありますように、機能低下を招く危機が、いろいろとありまして、その面積も減少してきている、という問題も抱えています。そういった中で、どうやって、沿岸域の生態系を守るための活動を支援していくのか、ということで、これがわれわれとしても大きな課題と考えているところでございます。

まだまだ、予算の性質としては発展途上ではございますが、そういうことで、調査実証事業という、まだまだ、中途半端な段階の事業の形になっております。そういった中で沿岸域の、環境保全、生態系保全ということ、漁業者だけでなく、多くの国民の皆様のご協力得ながら、保全していこうという流れを作っていかなければいけないと、われわれも考えておりまして、そういった流れの中で、この事業を実施していらっしゃるわけでございます。本日のシンポジウムにおきましても、先生方のお話をうかがうことで、理解も深まって、われわれも、さらに次の段階に進んでいく力にな

っていければありがたいなあと、おもっておる次第でございます。

簡単ではございますが、シンポジウムの盛会と、みなさまのご健勝をご祈念申し上げて、一言ご挨拶させていただきました。

○長屋 石川課長ありがとうございました。ここで、服部会長からのメッセージをお預かりをしてございます。後ほどごらんをいただきますようにと思っております。

○メッセージ

海は新鮮で安全な魚を人々にもたらしてきました。この海の幸は四季折々の旬の味で私たちの食卓を彩り、いのちを支え、健康面からも世界的に評価されている我が国の食文化を育ててきました。

しかし、長い年月をかけて培ってきたこの食文化も次第に失われつつあります。

私たちは、この日本の食文化の良さを見直し、次代に繋げていくために、海的环境と資源をまもり、この海の恵みを享受するための様々な役割をそれぞれが果たしていかなければなりません。

今回のシンポジウムを機会に、私たちは今改めて海と魚と食について、それぞれの立場から共に考え、豊かな国民生活の実現に努めていこうではありませんか。

2008年1月19日

海と魚と食を考える会代表 服部幸應

○長屋 それでは、内山節先生から「里海へのメッセージ」と題しまして基調講演をいただきます。パンフレットの中に、内山先生からいただきましたレジュメを入れてございますので、参考にしていただきたいと存じます。内山先生のプロフィールにつきましては、資料の3ページに掲載をして

ございます。宮原専務より若干ご説明をいたしましたが、後ほどごらんをいただきたいとおもいます。それでは、内山先生よろしくお願いを申し上げます。

テープ1 終わり。